

26) 臍帯切断と歯との関連

Cut the Navel Cord and Dentistry

医の博物館 西巻明彦

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*

臍帯切断について蔵方宏昌氏は、竹刀、銅刀、鉄の小刀、鋏の他に特殊な物として歯による咬断、焼断法を取り挙げている。今回歯による咬断法を中心に、他の切断法との比較検討を行った。

臍帯切断は、出産後胎盤が子宮から出てくるまでの間に新生児と臍帯を切断することであり、神聖視される瞬間である。『日本書紀』（720年頃）巻2神代下に木花開耶姫が三人の子の出産時に「竹刀をもってその児の臍を切る。その棄てし、竹刀、終に竹林に成る。故、かの地号けて竹屋となる。」という記述がある。竹刀の具体的切断法は、臍帯を圧迫、挫滅して血管を押し潰すように切断するという。この結果、出血量を少なくすることができる効用がある。このような方法は『山槐記』（1187）、『萬安方』（1315）、『御産所日記』（1434）にもみられ、広範囲に定着していたことがわかる。

一方銅刀については、丹波康頼が『医心方』巻25に中国伝統医学の産科書『産経』を引用して、銅刀を用いることを記載している。

これについては『康和元年御産部類記』に銅刀の記録が見られる。

室町時代までは竹刀を使用することが一般的であったが、江戸時代に入ると次第に鉄の小刀が使われるようになったと言われている。『産胞衣納伝記』には、「元成伝に新しき小刀一本添る。中心を紙にて包む事竹刀に同じ。これは竹刀には臍の緒つきにくき故に、本の小刀にて切ん為なり。」と記しており、竹刀の切断しづらい点を指摘し、小刀で切ることをすすめる。竹刀は儀式として使用することを唱えている。竹には魔除けの効果があると考えられていた。

江戸時代も後半になると鋏の使用が一般的となってくる。『産科記聞』（1813）によると「臍帯五寸の許のこして切るべし。麻緒にてくくり、その外面を切るなり。否則すべりて切れ難きなり。鋏刀にてつみきるとも構わぬなり。」と記されている。この時代に徐々に医師や産婆に広まっていったと考えられている。

特殊な方法として、歯で臍帯を切断する方法、艾で焼断する方法が存在する。歯で咬断する方法は、梶原性全の『萬安方』の中に『幼幼新書』（1150）の記載が引用され、「須らく令人は単衣物を隔て咬断す。」と述べられている。『保産道志類辺』（児島尚善、1781）に「吾邦の習せは竹刀を用いて、鉄の刃ものを戒む。おもうに、是冷鉄の氣、生児をそこなう事を恐れてなり。然るに今の世の人、只俗礼のごとくおもひて、竹刀に断まねして、実は大なる誤りなり。…中略…今したしく試見るに、懷にて暖める剪刀を用ゆるを、大いによしとす。」と記されている。『内経素問』平人氣象論には、「婦人の手の小陰の脈動いて甚だしきものは、妊子なり。」と記され、陰陽別論には「陰にうち、陽は別なり。之を子有りと請う。」と述べられている。これについて、高士宗の説は「陰氣が旺盛になりすぎて、内に搏動して陽と調和しない。」と解説している。このことから本来胎児は陽であり、陰が盛んになることで適度なバランスをとっていると考えられる。臍帯切断は母体から離れる瞬間であり、歯という体内環境に近い温度で切断すると同時に温かい呼吸を吹きかけることにより新生児に新しい気をもそそぐという二重性の意味が存在すると考えられる。